

山家富貴銀千樹

さん か ふう き ぎんせんじゅ
山家の富貴は銀千樹

漁夫風流玉一簍

ぎよ ふ ふうりゅうぎよくいっ さ
漁夫の風流玉一簍

さんらいしゅう
『三頼集』



慌ただしい年末年始が過ぎて、成人式。そして、暦はいよいよ「大寒」に向かいます。一年のうちで、もっとも寒さの厳しい季節です。

前回まで、三回にわたって、ここ、塩山にある本山向嶽寺の開山、抜隊得勝(1327-1387)禅師の『法語』を味わってまいりましたが、今回からは、折々の『禅語』を採り上げていくことといたします。

さて、今回の禅語、

さん か ふう き ぎんせんじゅ
山家の富貴は銀千樹

ぎよ ふ ふうりゅうぎよくいっ さ
漁夫の風流玉一簍

「山家」、山に住まう者にとっての「富貴」つまり豊かさとは何か...それは雪に覆われ、白銀に輝く千本万本の木立の樹樹。

それでは「漁夫」、海に住まう者の楽しむ「風流」とは何か...それは被っている水滴が凍り付き、宝玉のようにキラキラと輝く様子。

あるいは木を伐り、あるいは猟をする...山に生きる者に、生活の上での経済的な「富貴」など、望むべくもありません。危険と隣り合わせの厳しい生活です。

海に生きる者も同様です。「板子一枚下は地獄」という言葉がありますが、気まぐれで圧倒的な自然の力に翻弄されながらの生活は、「風流」など決め込んでいる余裕はない、一寸先は闇の生活です。

しかし、そんな過酷な暮らしの中にもちゃんと「富貴」はある...

富を蓄え、贅沢な暮らしを築き上げなくとも、ただ、目を上げて山を見れば良い...そこには、どんな人工的な富よりもはるかに美しく、荘厳な景色がひろがっている...

「富貴」とは、わたしたちが手許にかき集め、所有することによって得られるものではないのです。あばら屋に住み、粗末な身なりであっても、目の前一杯にひろ

がる一面の銀世界を味わうのに、何の妨げもない。

ここからが自分の所有物、自分の場所だ、ということさえなければ、天地一枚まるごとすべてが自分の家、自分の住処すみか。自他の区別を設けて、世界を狭くしているのは、自分自身なのです。

「風流」も同じです。ないないづくしの暮らしの中では、「風流」なんてとんでもない...そんなつぶやきも聞こえてくるかもしれませんが、そうではありません。

「風流」を見いだすかどうかは、その人の心の問題です。

危険で過酷な暮らしの中でも、「風流」はある。寒風が吹き付ける冬の浜辺みので、簑が凍り付いて玉のように光る...しかし、その姿の中にこそ、本物の「風流」を見ることができる。

辛い暮らしのまっただ中で、「風流」を...こういうときの「風流」とは、何もやせ我慢をして「風流」を演ずるのではないのです。「風流」というものが、娯楽の延長だったり、文化人風の或る種の「すました」ポーズのようなものであるのなら、それはとてもつまらないことです。しかし、そのようなものはここでいう「風流」とは違います。

禅の世界で「風流」というときには、次のような言葉が一番ぴったりくるのです。

意気あるときに意気を添え

風流ふうりゆうならざるところまた風流ふうりゆう

「意気軒昂い き けんこう」という言葉がありますが、勇氣凛々ゆう きりりん、やる気十二分あふ...溢れるような気持ちでいるところ、なおそれにまた「意気」を添える...火に油を注ぐような、気迫と気合いの世界。

そこまで来れば、とても「風流」などと澄ましているわけにはいきません。むしろ暑苦しく、野暮ったいことこの上ない、無骨な世界です。だから「風流ならざるところ」というのです。しかし禅の世界では、さらに踏み込んで、その「風流ならざるところ」が「また風流」だと言うのです。

「風流」とは見てくれやポーズのことではない。生き方の問題です。

なりふり構わず、ひたすら全身全霊で生き抜く...人の目など、気にしている暇はありません。やるべきことを、やってやってやり抜く...脇目もふらず、全力でやり切る...つまらないことを振り捨てて、「無心むしん」になってやり抜く...

そして「無心」に徹したとき、寒風の吹きすさぶ浜辺みので、凍てつくような寒さの中、キラキラと輝く玉のような簑の存在に気が付く...その輝くものにハッと気が付き、そしてそれをわがものにしてい...これが、本当の「風流」。

わたしたちも、本物の「富貴ふうき」、本物の「風流」を身につけていきたいものです。